

# 尻高左京亮についての覚書

—— 関東管領上杉顕定と越後国上田荘との関わりをめぐって ——

森 田 真 一

- |                |              |
|----------------|--------------|
| 1. はじめに        | 3. 尻高左京亮について |
| 2. 尻高左京亮以前について | 4. おわりに      |

## —— 論文要旨 ——

関東管領上杉顕定の家臣であった尻高左京亮は、これまでの上杉氏研究によって検出された島田氏、力石氏、紀五氏らと同様に、主家である上杉氏の盛衰とともに十六世紀初頭までを広範囲に活躍した人物であったと評価される。名字の地である尻高を領有していたと推測されつつも、上野国守護所である板鼻や武藏国有数の港湾都市である六浦、そして、菩提寺を建立して深い結び付きを有していたと考えられる越後国上田荘内の木六郷等において、その活動が確認される。左京亮の実名は景清であったと考えられ、景清は上田荘内の菩提寺である長慶庵や禅宗寺院である雲洞庵と上杉顕定との間を取り次ぐ役割を果たしていた。その際、顕定は上田荘内の寺院の経済活動や住職の任命と深く結び付いていたことが確認され、十六世紀初頭の段階における関東管領家（山内家）と越後国魚沼郡との関係は依然として維持されていた。当該期、越後上杉氏の分国内において確認される景清の軌跡に類似する氏族として、平子氏や石川氏が上げられる。両氏の活動内容から景清の存在形態は特殊なものなのではなく、十六世紀前半までの上杉氏一門の近臣一般にみられるものではなかろうか、という見通しを得た。

### キーワード

対象時代 室町・戦国期

対象地域 群馬県（上野国）・新潟県（越後国）

研究対象 尻高氏

## 1. はじめに

本稿は、関東管領上杉頸定の家臣である尻高左京亮の動向を考察することによって、当該期における関東管領家（山内家）と越後国上田荘との関わりを若干検討しようとするものである。

佐藤博信氏の一連の研究によって、関東管領上杉氏の家臣団の実態が解明されつつある<sup>1)</sup>。佐藤氏により検出された氏族は、島田・力石・紀五・判門田・木部・木曾・奥津・菊地・会田・大喜・菅野ら各氏の多数に上っている。これらの氏族の族的性格として共通しているのは、①上杉氏分国内の各地に広範に活躍したということ、②上杉氏権力の中枢に位置していたために主家である上杉氏の没落とともにその勢力を大きく衰退させたということ、であろう。越後上杉氏の分国内において関東管領上杉氏の家臣と階層的に概ね一致する氏族は、「上杉方被官、長尾、石川、斎藤、千坂、平子、此五人為古臣、飯沼等者非評定衆也」<sup>2)</sup>と現れる諸氏なのではなかろうか。これらの氏族と関東との結び付きは、意外に強い<sup>3)</sup>。そのため、越後上杉氏の分国・山内上杉氏の分国といった枠組みを所与の前提とすることなく、氏族の実態に即して考察を行う必要がある<sup>4)</sup>。

以下では、佐藤氏の論考に学びつつ、越後国との関わりから尻高左京亮の軌跡を追っていきたい。

## 2. 尻高左京亮以前について

これまでに尻高氏（尻高左京亮）に関するまとめた言及がみられるのは、佐藤博信氏の論考が唯一のものではなかろうか（佐藤 1989）。佐藤氏が指摘をしたのは、以下の4点であると思われる。(1)尻高氏は上杉頸定の山内上杉氏入嗣にともなって随伴した越後武士ではないかと推察され、寛正年間（1460～1466）以降に越後関係史料に現れる。(2)尻高氏は、力石氏や屋代氏とともに上杉氏の六浦支配に関わる史料に現れる<sup>5)</sup>。(3)文亀二年（1502）に上野国守護所である板鼻において行われた関東管領上杉頸定による亡母十三回忌法要の記録によって、尻高左京亮が布施奉行に任命されていることを確認できる<sup>6)</sup>。(4)尻高氏は上杉頸定の権力構造にあって、極めて重要な位置を占めたのではないかと推測される。

以上の点は、尻高氏に関する貴重かつ重要な指摘である。特に尻高氏が越後武士であると推測されるにも関わらず板鼻と六浦においても活動が認められるという、活動範囲の広さは注目されよう。

ここではまず、左京亮についてみていく前に左京亮以前の尻高氏について確認しておきたい。その出自については、上記(1)にあるように、佐藤氏は尻高氏を越後武士ではないかと推察している。尻高氏の系図や系譜類については、「大神姓尻高家系」<sup>7)</sup>や『高山村誌』に掲載されている尻高氏の系譜、尻高氏過去帳がある<sup>8)</sup>。いずれの史料

も記載内容からその系統を溯ることは困難であるが、史料中に「沼田」などが散見されることから尻高氏の本貫地はやはり名字の地である尻高（群馬県高山村）に比定するのが適切なのではなかろうか。それは、十六世紀後半と推測される正月二十一日付、尻高源次郎に宛てた某判物写に「本領尻高」と記されている点からも首肯されると思われる<sup>9)</sup>。尻高氏は名字の地である尻高を拠点としながらも、関東管領家が上田荘を領有していたことから<sup>10)</sup>、上田荘においても所領を得たのではないか。そして、寛正年間以降に尻高氏は拠点の比重を上田荘内に移していくようである。次の史料を確認しよう。

〔史料ア〕

奉寄進

越後国上田庄早河郷北方之内并大窪名之内御恩之地、合參拾貫文之所 お養父新三郎為菩提、彼長慶庵お致建立、為雲洞庵之末庵、彼庵ニ奉寄進所実也、若彼庵領等ニ於違乱之子孫者、可為不孝候、別紙ニ坪付 お認渡申所也、仍為後日寄進状、如件、

尻高

寛正四年ミつのとの八月廿二日 平亀鬼丸  
ひつし 代閔田

越後国上田庄木六郷

長慶庵之寄進状<sup>11)</sup>

平 実綱（花押）

史料アは、寛正四年（1463）に尻高亀鬼丸と名代の閔田実綱が「養父新三郎」の菩提を弔うために、上田荘の三十貫文の地を長慶庵の建立のために寄進したものである。史料アの発給される3年前の寛正元年（1460）、「尻高源三郎」が前年の長禄三年（1459）に上野国で行われた羽継原合戦において、父が討死したことを将軍義政から賞されている<sup>12)</sup>。

さて、史料アから、尻高家では菩提寺である長慶庵を上田荘内に建立していたことが分かる。また、長享二年（1488）に関東から上田荘内の「安楽精舎（安楽寺）」「大義寺」まで、万里集九の案内役として尻高孫次郎が付き従っている<sup>13)</sup>。史料アの「亀鬼丸」と「孫次郎」との関係は不明ながら、「安楽精舎」の住職である「璠玉溪」は、尻高孫次郎の家弟であるという（市木 1993）。よって、尻高氏は上田荘内に菩提寺として長慶庵を建立し、また、一族から安楽寺の住職を輩出していたことになる。この時期における尻高氏と本貫地の尻高との関わりは全く不明ながら、長慶庵や安楽寺などの寺院との密接なつながりから、尻高氏は拠点の比重を越後国上田荘内に移していくと推測されよう<sup>14)</sup>。

以上、2では、尻高氏の本貫地は名字の地である上野国尻高であると考えられること、尻高氏は菩提寺を越後国上田荘内に建立していることから、おそらく十五世紀半ば以降に拠点の比重を上田荘内に移していくと推測されること、などを改めて確認した。

### 3. 尻高左京亮について

佐藤氏も指摘するように、尻高左京亮は上杉頤定との関係で史料中に確認される。長享二年（1488）と考えられる十一月二十三日付、頤定から揚河北の中条弾正左衛門尉（定資）宛ての書状に「巨細尻高左京亮可伝語候」<sup>15)</sup>とみえ、永正六年（1509）七月以降の頤定の越後介入に関わる七月二十六日付、可諱（頤定）から発智六郎右衛門尉に宛てた書状に「度々尻高左京亮方へ被申越旨候哉」<sup>16)</sup>とあるように、左京亮は頤定の側近として活動している。

とはいって、これまで左京亮の実名や花押などは全く不明であり、左京亮と在地社会との関わりをうかがうことはできなかった。しかしながら、万里集九の『梅花無尽藏』において、2で言及した長享二年（1488）十月に集九を関東から上田荘へと案内した「尻高孫次郎」の他に、集九から詩を送られている人物として「尻高左京兆景清」を確認できる<sup>17)</sup>。「左京兆」とは左京大夫の唐名に限定されるのではなく広く左京職の唐名ともされ<sup>18)</sup>、また、当該期に官途「左京」を称する尻高一族は左京亮以外に確認されないことから、『梅花無尽藏』に記されている「尻高左京兆景清」をこれまでみてきた「尻高左京亮」と同一人物とみてよかろう<sup>19)</sup>。

さらに、左京亮の実名が景清に確定されることによって、次の史料が注目される。

#### 〔史料イ〕

当庵之御事、善実へ御与奪之由、披露仕候、雖然今日迄者は是非不被申候、次長慶庵事、善隆書記可有掃治由尊意、尤心得申候、此段可被得尊意候、恐々敬白、

六月十四日

左京亮景清（花押）

雲洞庵

拝復 侍者御中<sup>20)</sup>

史料イは、雲洞庵の住職が「善実」に譲られたことを左京亮景清が以前に某に「披露」をしたが、未だに返答が得られていないこと等を雲洞庵に対して申し送ったものである。宛所に「拝復」とあることから、史料イは雲洞庵からの某への「披露」の要請を受けての左京亮景清の返信ということになろう。雲洞庵は応永二十七年（1420）に関東管領の上杉憲実によって再興された由緒をもつ禅宗寺院であり、関東管領家と深いつながりがあった<sup>21)</sup>。史料後半の「長慶庵」は2においてみたように、尻高龜鬼丸が養父新三郎の菩提を弔うために寛正四年（1463）に建立した寺院である。したがって、史料イの年次はそれ以降ということになる。史料中の「長慶庵」の記載が年代的に整合し、また、署判に「左京亮景清」とあることから、この左京亮景清をこれまでみてきた尻高左京亮景清としてよかろう。よって、この史料から景清の花押形も確認することができる<sup>22)</sup>。史料イは、現在確

認できる、景清の発給した唯一の文書ということになるのではなかろうか。

さて、この書状において注目されるのは、文中に「披露」とある点であろう。すなわち、景清は雲洞庵の意向を景清の主家に対して「披露」する取次役の役割を果たしていると考えられよう。では、景清が取り次ぎを行った人物とは一体誰であろうか。景清が側近として活動した関東管領上杉頤定、もしくは越後守護家の当主（十五世紀後半では房定か房能）が考えられよう。この点については、景清と頤定のつながりや上田荘が関東管領家の所領であったということ、また、長慶庵址の所在地である大木六に位置している木六神社の創建に関する所伝に、「関東管領上杉ノ将校尻高平ノ龜鬼丸殿城居致シ」とあることから<sup>23)</sup>、景清が「披露」を行った人物を上杉頤定とみてよかろう。さらに、「披露」の文言に着目すると、次の史料が注目される。

#### 〔史料ウ〕

当庵方丈御建立之御費用之員数之事承候、番匠等仁相尋候江者、五万疋御座候者、可被為造畢候由申候、雖然於関東御静謐之上者、必可有御建立歟、只今者御無為之儀無之候間、及両年方丈之形無現出候、且者先残之道場之事候、愚僧も老期与申、病者与申、一剋も早速ニ致造立度願望候儘、庄中之各々へ勧加之儀申度候、但シ 御屋形様之御意如何与存候、若又尤与被思召候者、奉加之儀可思立候、以此旨可然之様ニ御披露簡要候、恐々敬白、

三月廿一日

猷映

進上 尻高左京亮殿<sup>24)</sup>

史料ウは、長慶庵の「方丈御建立」のために多額の資金が必要であるため、「奉加」金を「庄中」において徴収してよいか「御屋形様」に「御披露」して欲しいと猷映が尻高景清に対して要請したものである。文化二年（1805）の「寺院取調」という史料に、雲洞庵六世の猷映が一時荒廃した長慶庵を再興したとあり、それが史料ウの署判者である猷映のようである<sup>25)</sup>。猷映は永正五年（1508）八月に示寂しているようなので<sup>26)</sup>、史料ウはそれ以前のものとなる。宛所が景清であり、長慶庵に関する内容であること、「御屋形様」の前に闕字のあることから、文中の「御屋形様」を史料イの「披露」相手である上杉頤定とみてよかろう。

注目すべきは、「庄中之各々へ勧加之儀申度候、但シ 御屋形様之御意如何与存候、若又尤与被思召候者、奉加之儀可思立候」とある点であろう。この「庄中」とは、長慶庵を含む莊園、すなわち上田荘のことであろう。上田荘内において「奉加之儀」（奉加金）を徴収するためには、「御屋形様之御意」、すなわち頤定の承認が必要であったことがうかがえる。文龜二年（1502）に頤定が行った法要において景清が「布施奉行」を務めていることか

ら<sup>27)</sup>、景清と寺院との特別な関係も想定される。しかしながら、やはり、上田荘内における経済活動の権益と顕定とは深く結び付いていたのではないだろうか。

というのは、顕定と上田荘との関わりを示す史料として、顕定が雲洞庵に対して「頸城郡苅田」と「福光」の寺領を「上田庄馬場郷内桐沢分」と交換して、その所領を保障した六月二十八日付の史料が存在するのである<sup>28)</sup>。『越佐史料』によって、この史料は顕定の越後介入に関わらせて永正六年（1509）に比定されてきた。しかしながら、顕定の花押は三種類認められ（花押I、花押II、花押IIIとする）、花押の改判時期からこの史料を永正六年に比定するのは適切ではない。概略を述べると、この史料において顕定は花押IIを用いており、年次の推測される花押II使用の最下限は文亀二年（1502）に三田弾正忠に充てた三月晦日付の書状である<sup>29)</sup>。また、顕定が花押IIIを用いている確実な初見史料は、永正元年（1504）と推測されている九月二十五日付の大森式部大輔宛書状である<sup>30)</sup>。したがって、雲洞庵に対して寺領安堵を行った先の史料は、少なくとも永正元年以前のものということになる。永正六年の越後介入に際して顕定は雲洞庵に対して寺領安堵を行ったのではなく、永正元年以前から顕定と雲洞庵との間には所領安堵の関係があったのである。

史料イ・ウをあわせて考えると、少なくとも上田荘内の雲洞庵や長慶庵などの住職の任命や寺院の経済活動の承認に、関東管領家が深く関わっていたことは間違いかろう。その際、両者の取次役として活躍していたのが尻高景清であった。

「御屋形様」である顕定との密接な関係によって活躍をした景清も、永正七年（1510）六月の顕定陣没によって力石氏などと同じように大きく勢力を後退させたようである。長尾為景の活動した時期に作成されたと推測されている<sup>31)</sup>信濃高梨氏の所領注文において、「上田内尻高左京亮知行分」が「替地」として為景から高梨氏に対して「相渡」されていることが確認できる<sup>32)</sup>。「上田」とは上田荘のことであろうから、この「尻高左京亮」を景清とみてよかろう。景清の所領が取り上げられる契機となったのは顕定の死去以外には考え難いことから、この史料の作成年代は永正七年六月以降であろう。これによって、尻高氏の上田荘内における所領が喪失したと考えられる。後年の永禄四年（1561）作成と推測される「関東幕注文」<sup>33)</sup>において「尻高左馬助」を「沼田衆」の中に確認できることから、尻高氏の活動拠点が本貫地の「尻高」に移ったと推測されよう。

尻高氏は、十五世紀後半から十六世紀初頭を通じて、菩提寺を建立した越後国上田荘や上野国守護所である板鼻、江戸湾の有数の湊津である六浦などで広く活動していた。そして、その後に尻高氏は本貫地の尻高の地に移

住して、十六世紀後半の局面に対処していったと推測されよう。

#### 4. おわりに

以上、本稿では、①尻高氏は尻高の地を本貫地としつつも、菩提寺を上田荘内に建立するなど上田荘を拠点にしていたことがうかがわれる、②尻高左京亮の実名は、景清であると考えられる、③景清は、雲洞庵や長慶庵などの上田荘内の寺院と関東管領上杉顕定との間を取り次ぐ役割を果たしていた、④関東管領家と上田荘との間には経済的に密接な関係が推測される、⑤尻高氏は顕定の死去とともに上田荘内の所領を喪失し、拠点を本貫地の尻高に移していったと推測される、といった点を確認した。

これまでみてきた尻高氏の動向に類似する氏族として、平子氏や石川氏が上げられる。平子氏は本貫地である平子郷（武藏国）を十六世紀前半まで領有しながら、越後守護上杉房定や上杉房能の近臣として活躍していた<sup>34)</sup>。石川氏は平子氏と出自を同じくし、十四世紀後半に犬懸上杉家の近臣としての活動が認められる<sup>35)</sup>。十五世紀後半から十六世紀初頭にかけては「石川駿河守」が越後を拠点にしつつもしばしば関東へ越山しており、越後守護の上杉房定や上杉房能、関東管領上杉顕定・上杉憲房、八条上杉家などの上杉氏一門との多様で密接な関わりが確認できる<sup>36)</sup>。上杉氏の近臣であった氏族の存在形態は、上杉氏の政治動向に大きく規定されたものであった。

散在的な所領を有していた彼らが本拠を中心に集住し、本格的な領域支配を展開するのは、次の段階であろう。このことは、要害や館と町場が一体化する戦国期城下町の本格的な形成が十六世紀初頭（前半）以降である、という指摘とも緊密に結び付いてくると思われる<sup>37)</sup>。

#### 註

- 1) 佐藤氏の上杉氏に関する研究は（佐藤 1989、2000）などを参照。
- 2) 『蔭涼軒日録』長享二年（1488）七月十日条。該当箇所は、「鎌倉御家人 平子氏の西遷・北遷」（横浜市歴史博物館、2003、108頁）に写真が掲載されている。
- 3) 周知の通り、長尾氏は関東において總社・白井・足利等に分流して活躍している。石川、平子両氏についても、後述するように関東とのつながりが深い。千坂氏も、石川氏と同様に犬懸上杉家の家臣として現れている（山田 2003）。
- 4) 関東管領家・越後守護家・上条家などの上位権力における血縁関係を媒介とした権力行使の実態については、（森田 2001）参照。
- 5) 「金沢文庫文書」（『神奈川県史 資料編3 古代・中世（3下）』6454号、6456号）。力石氏に関しては（佐藤 1989）、屋代氏に関しては（井原 1995）参照。なお、十五世紀後半の段階において、越後国内においても力石氏、屋代氏の活動が確認できる。力石氏に関しては、「蒲原郡白河庄等段錢帳」の金津保において「力石方」とあり（『斎藤実寿氏所蔵文書』『新潟県史 資料編 中世補遺』4450号）、屋代氏に関しては、明応六年（1497）四月に中条氏に宛てて発給されたと考えられる段錢請取状の連署者の一人に「屋代近江守頼国」を確認できる（『山形大学

- 所蔵 中条家文書』『新潟県史 資料編4 中世二』1855号)。両者ともに詳細は不明ながら、信濃國と上杉氏との関わりが深かったという佐藤氏の指摘は、越後国に關しても当てはまるのではなかろうか(佐藤 1989など)。なお、上杉氏の六浦支配に關しては、(佐藤 2000) 参照。
- 6) 「談柄」(『群馬県史 資料編7 中世3』1859号)
- 7) 「御継図集並大神姓尻高家系」(マイクロフィルム版『上杉文書目録』リール番号3、整理番号40) に所収。
- 8) (高山村誌編纂委員会 1972) 参照。
- 9) 「歴代古案」(『戦国遺文 後北条氏編』第三巻、2488号) では、本史料の署判を(北条)氏邦として、年次を天正十一年(1583)と推測する。羽下徳彦他校訂『歴代古案 第四』(1160号、続群書類從完成会)では、署判を民部と読み、年次も未詳であるとする。
- 10) 文安元年(1444)八月に閔東管領の上杉憲実は、「越州上田庄」等を「次男龍春(房顕)」に対して譲与している(『上杉家文書』『新潟県史 資料編3 中世一』815号など)。
- 11) 「龍泉院文書」(『新潟県史 資料編5 中世三』2549号)
- 12) 「御内書案・御内書引付」(『群馬県史 資料編7 中世3』1659号)
- 13) 『梅花無尽藏』(『五山文学新集』第六巻)
- 14) 史料アに「上田庄木六郷」とあるように、長慶庵址は現在の塩沢町大木六に比定されるようである。大木六には、尻高実頼が居住していたとされる「殿屋敷」という地名があるという(かみくひむしの会 1972)。また、大木六には「宿屋千軒」と呼称される繁栄した地があったとされ、その地に長慶庵址があるという(金子 2002)。尻高氏と木六郷との密接なつながりや木六郷の繁栄した証左となろうか。
- 15) 「東京大学史料編纂所所蔵 中条氏文書」(『新潟県史 史料編4 中世二』1742号)
- 16) 「反町英作氏所蔵 発智氏文書」(『新潟県史 史料編4 中世二』1640号)
- 17) 『梅花無尽藏』については、(市木 1993) 参照。また、『梅花無尽藏』における「尻高左京兆景清」については、(中川 1997) が言及している。
- 18) 「左京兆」の語釈については、(市木 1993) 参照。
- 19) 『梅花無尽藏』において集九が景清を「有半面之雅」(わずかな知り合いであった(市木 1993)) と述べているように、それまでに両者の間にはわずかながら交流のあったことを示唆している。また、『梅花無尽藏』によって集九と交流のあったと認められるのは、越後関係では守護上杉房定、長尾輔景(存胤)、宇佐美孝忠、千坂実高など政治的・文化的に高い水準にあったと思われる人物である。このことから、景清の社会的地位の高さをうかがうことができよう。
- 20) 「雲洞庵文書」(『新潟県史 資料編5 中世三』2529号)
- 21) 憲実と雲洞庵との関わりについては、(田辺 1999) 参照。現在でも雲洞庵には、憲実の木像や憲実が愛用したと伝える天目茶台があるという。
- 22) 史料イの景清書状(雲洞庵文書)については、新潟県立文書館蔵の写真帳によって確認をした。なお、雲洞庵文書や龍泉院文書に關しては、(細矢 1989) に多数の写真が掲載されている。
- 23) 「明治十六年南魚沼郡神社明細帳」(『塩沢町史 資料編』上巻、第二編中世、65号)
- 24) 「龍泉院文書」(『新潟県史 資料編5 中世三』2550号)
- 25) 長慶庵の建立に關しては、(山上 2002) 参照。
- 26) 『塩沢町史 資料編』上巻、第二編中世、49号の注による。
- 27) 前掲「談柄」
- 28) 「雲洞庵文書」(『新編 新潟県史 資料編5 中世三』2530号)
- 29) 「武州文書」(『新編 埼玉県史 資料編6 中世2』64号)。本史料については、(湯山 1977) 参照。また、頸定の花押形については、東京大学史料編纂所蔵の影写本によって確認をした。
- 30) 「相州文書」(『北区史 資料編 古代中世1』254号)。本史料の頸定の花押形についても、東京大学史料編纂所蔵の影写本によって確認をした。
- 31) (湯本 1981) 参照。
- 32) 「高梨文書」(『新潟県史 資料編5 中世三』3502号)
- 33) 「上杉家文書」(『群馬県史 資料編7 中世3』2122号)
- 34) 平子氏については、(矢田 2003) 参照。
- 35) 石川氏と犬懸上杉氏に關しては、(山田 2003) 参照。
- 36) 十五世紀末から十六世紀前半にかけての八条家の越後での動向に關しては、(森田 2004) 参照。「石川駿河守」については、「守護上杉定実と守護代長尾為景」(『上越市史 通史編2 中世』第三編第二章、上越市、2004年末刊行予定) において述べる予定である。
- 37) (齋藤 2002) 参照。越後国における十五世紀末の集落の移動や、十六世紀前半における領主権力の本拠の形成については(矢田 2001) 参照。

## 参考文献

- 市木武雄 1993 『梅花無尽藏注釈』第二巻、第三巻、続群書類從完成会  
井原今朝男 1995 「文書からみた屋代氏の動向」『屋代城跡範囲確認調査報告書』更埴市教育委員会  
金子 達 2002 「中世の交通と産業」『塩沢町史 通史編』上巻、中世第五章、塩沢町  
かみくひむしの会 1972 「越後国上田庄と上田衆一第三次調査報告一」『かみくひむし』8号  
齋藤慎一 2002 「終章」『中世東国の領域と城館』吉川弘文館  
佐藤博信 1989 「上杉氏奉行人力石氏について」『中世東国支配構造』思文閣出版、初出1988  
佐藤博信 2000 「武州六浦における大喜氏と山口氏の位置」『江戸湾をめぐる中世』思文閣出版、初出1998  
高山村誌編纂委員会 1972 『高山村誌』  
田辺久子 1999 『上杉憲実』吉川弘文館  
中川徳之助 1997 『万里集九』吉川弘文館  
細矢菊治 1989 『塩沢町の文化財』カクショウ印刷  
森田真一 2001 「上条上杉定憲と享禄・天文の乱」『新潟史学』46号  
森田真一 2004 「戦国の動乱」『笛神村史 通史編』中世第四章、新潟県笛神村  
矢田俊文 2001 「上杉謙信とその時代」『よみがえる上杉文化～上杉謙信とその時代～』新潟県立歴史博物館  
矢田俊文 2003 「中世平子文書の伝来と越後平子氏」『鎌倉御家人 平子氏の西遷・北遷』横浜市歴史博物館  
山上卓夫 2002 「内乱と守護の時代」『塩沢町史 通史編』上巻、中世第三章、塩沢町  
山田邦明 2003 「犬懸上杉氏の政治的位置」『千葉県史研究 第11号別冊 中世特集号 中世の房総、そして関東』千葉県  
湯本軍一 1981 「高梨氏の全盛」『中野市誌 歴史編(前編)』第三編第二章第三節、中野市誌編纂委員会  
湯山 学 1977 「大江姓長井氏の最後」『多摩のあゆみ』7号